

## 仏様のおはなし新シリーズ第47集その1 「花まつり」

4月8日は「花まつり」、お釈迦様の誕生日をお祝いする行事として毎年、全国の寺院で大切に行われています。いまからおよそ2500年前にお生まれになったお釈迦様の誕生の姿を形取った、誕生仏に甘茶注いでお祝いたします。それは、あらゆるいのちを教え導くお釈迦様の誕生に、天地が感動して甘露の雨を降らせたという言い伝えに始まるようです。

お釈迦様は、生まれてすぐに「天上天下唯我独尊」と言われたと伝えられています。この言葉は、唯だ「私ひとりだけが尊い」という意味をあらわしているではありません。また、他と比べて自分のほうが尊いということでもありません。

この世の中で、みんなそれぞれに、他にはないただひとつの尊い存在であり、一人ひとりがいのちの尊いのをいただいているという意味です。私の「いのち」、私の人生は、私しか生きられません。父母・兄弟・夫婦であっても、誰とも代わることのできない、代わってもらうこともできない、この私の「いのち」のままに尊いということです。私たちは、姿や形、能力にも違いがあります。それゆえ、財産や名誉や地位によって、自分と他人とを比べて、いいとか悪いとか、上だとか下だとか無意識に考えてしまうことがあります。

しかし、お釈迦様は、人間は条件や生まれによって尊いのではない。地位や名誉や健康や能力、金銭の有る無しを超えて、そのままで尊い「いのち」と私を見て下さっているのが仏様なのだとお示しになりました。

花は人の心をうつします。ひとつひとつは弱く見えても天地の恵みに支えられて咲きます。人も花と同じように様々ないのちに支えられ、生かされているかけがえのないいのちを生きているのだと気づかされます。

いのちを奪い合い、いのちを軽んじているとしかいいようのない現代社会にあつて、私たちは自分自身を深く見つめ、「いのち」の本当の尊さに、めざめていかなければなりません。

仏様の願いは、すべてのものを「いのち」の尊さにめざめさせ、一人ひとりをもらさず平等に救いということです。「花まつり」を通して、ともに手をあわせ、いのちの尊さに思いをはせ、仏様の願いに耳を傾けさせていただきましょう。

